

十八年、高屋に拠点としての集会所を建設、四十二年姫路教会但馬支部として発足した。五十年十二月、会員増に應じて支部道場を開設、五十七年十二月に塩津に移転した。

市内には四法座（各法座主が統轄）あり、会員数約六〇〇強である。但馬内の各法座は交互で塩津法座所を使用している。

専修念仏

「小川宗」とも「小川法」とも呼ばれる。豊前国の小川丈平（独笑）を法祖とする。法然・親鸞の教えの原点に帰り、在家仏教に徹して寺院・仏壇・仏具を廃し念仏専修の道を歩むもので、葬儀のときは同信者が集まって「葬文」を読み上げ、念仏高唱のうちに簡素に終える。

明治三十七年（一九〇四）ごろ、有志が九州に小川丈平を訪ね、その教えに帰依、豊岡町内・立野地区及び主として神美村香住地区の二〇数軒（浄土真宗・臨濟宗・曹洞宗に属していた）が離檀して専修念仏門徒となった。後に旧檀那寺に復帰したものを除き、現在は香住地区の約二〇軒が信心を守り続けている。

週一回、同信者の家で主婦を中心に念仏会を開き、戸主は毎月一回集まって念仏を唱える。小川丈平の命日（二月九日）には総会を兼ねて総本講念仏会を催し、三年ごとに九州本部と香住地区が交替で念仏全国大会を開いている。香住地区には小川丈平の分骨を得て名号碑を建て、集団の象徴としている（岸野利雄手稿より）。

念法真教

本部及び総本山は大阪市にある念法真教総本山小倉山金剛寺である。昭和五十三年七月、念法真教香住念法寺豊岡布教所として梶原で発足、五十六年に現在地（小田井町）に移り、五十七年四月豊岡念法教会に昇格した。

第七章 文化と社会

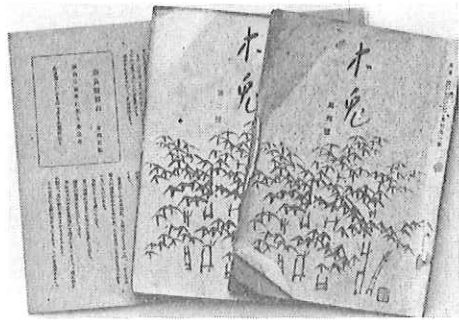
第一節 戦後の文学と美術

京極杞陽と再 京極杞陽（一九〇八—一九八一）は本名高光、旧豊岡藩主京極家十一代の当主で、明治四十一年東京本所で出生。大正十二年の関東大震災で父母・祖母・弟妹らを同時に失った。襲爵（子

爵）して華族に列し、学習院を経て東京大学文学部卒業後、昭和十二年から式部官として宮内省に出仕したが、戦争の激化に伴ない空襲を予測して十七年秋、妻子を郷里豊岡に疎開させた。二十年五月、たまたま病臥中に大空襲にあい、数日後に病をおして小諸（師虚子の疎開先）に辿りつき、さらに父祖の地豊岡に帰り着いた。

戦後、最後の貴族院議員に推されて出京することはあったが、戦後改革による世相一変の後には職に就かず、一市民一俳人として五十六年十一月八日に豊岡で生を終えた。

俳句とのかかわりは、祖父・父ともに俳句をたしなむ環境に育ったということもあるが、昭和十年から十一年にかけてヨーロッパ遊歴中の十一年四月下旬、ベルリンで高浜虚子を迎えて催された句会に出て入選したことが機縁となった。



写309 再刊『木兎』

美しく木の芽の如くつつましく 高光(杞陽)

虚子は終戦直後の二十年十一月、疎開先の小諸から丹波の西山泊雲の墓参をした後、孫の疎開先和田山に寄り、愛弟子杞陽をたずねて来豊している。その時の作「廢川に何釣る人ぞ秋の風」が碑に刻まれて円山川廢川跡の中央公園に建てられている。

二十一年七月、杞陽はかつて由利由人らによって発行され短命に終わった俳誌『木兎』を再刊主宰し、豊岡を拠点に広く俳句活動を開始した。

『木兎』は着実に発展を続けて、購読者・投句者は全国に及び、五十五年には四〇〇号に達したが、翌五十六年十一月に病没直後の発行になる第四二二号を以て終刊となった。

かねて辞世の意をこめて遺されていた句

さめぬなり一度眠りたる山は 杞陽

豊岡に帰住後は、『くくたち』(初句集)の杞陽は、草田男以後、ホトトギスが久々に得た新人の一人である(大野林火)といわれながら、中央俳壇に返り咲く機会を自ら絶って、この地で地方文化の向上に力を藉すことになったのであるが、豊岡で育てた傘下の句会には芽柳会(二十八年二月)・木の芽会(三十年四月)・葉桜会(三十一年六月)・五月会(三十五年六月)・杉葉会(三十七年四月)・若竹会(三十七年七月)・立野会(三十七年十二月)・柊会(三十八年十二月)・若葉会(四十一年一月)・踏青会(四十八年二月)などがある。

り、これらを総称して「豊岡木兎句会」と呼ぶ。

豊岡以外でも、近くは出石・城崎・和田山・峰山にも息のかかった句会があり、遠くは大阪・米子・津和野・萩・名古屋・東京などにも木兎句会ができていた。豊岡木兎句会では五十八年十月、句碑をかつての城山・神武山頂に建立した。

おもむろに晴れ上りたる雪山河 杞陽

五十九年八月には『豊岡木兎句集』が発刊され、門下一六〇余名が出句している。

京極杞陽俳句生活四〇余年の主な作品は、次の五つの句集に収められている。

『くくたち』

昭和十一年～二十年の作品

(上)二十一年七月発行
(下)二十二年四月発行

『但馬住』

昭和二十一年～三十四年四月の作品 (三十六年六月発行)

『花の日に』

昭和三十四年五月～四十一年の作品 (四十六年四月発行)

『露地の月』

昭和四十二年～四十九年の作品 (五十二年九月発行)

『さめぬなり』

昭和五十年～五十六年の作品 (五十七年十一月発行)

杞陽調といわれたその俳句の特質の第一は、高い詩心―印象詩風の詩情―にあることは、多くの評者の一致した見解である。

詩の如くちらりと人の炉辺に泣く

ロココ美として極まれる薔薇ばらもあり

あけぼのの夢の如くに蓮を見し

次にまた、ウイットがあるとか、ユーモアがあるとか俳諧味があるとかいわれるものがある。

都踊りはヨイヤサほほえまし

日向ぼこ してはをらぬか してをりぬ

春風や日本に源氏物語

秋風や日本に平家物語

また旧藩主の裔・武門の家柄を示すものも多い。

春風や但馬守は二等兵（教育召集で姫路入隊）

一卷の江源系譜 家の春（江源ニ近江源氏）

激変した終戦後の『但馬住』には、家族への情愛や但馬の風物を詠んだものが多い。

妻いつもわれに幼し吹雪く夜も

雪深き円山川のほとりなる
（昭和二十年冬）

城山のこのもかもの花辛夷（こふし）
（同四十五年春）

虚子の孫で俳誌『ホトトギス』を主宰する稲畑汀子は、『木兎』（追悼号）で次のように述べている。

「美しく木の芽の如くつつましく 高光（杞陽）

この句に俳人杞陽としての資質を見た虚子が、激賞したことが縁となり、日本へ帰国後、虚子門となられた。この出合いは杞陽さんによって運命的なものであった。以後、杞陽さんは虚子に傾倒し、俳句の師とし

てのみならず、人生の師として宗教的ともいえる程、虚子を慕い、虚子の影響を受けられた。虚子にしても自分を師として唯一筋に教えを守ってこられた杞陽さんに、深い信頼をおいていたに違いない。

また、神戸新聞の俳句選者後藤比奈夫も、同追悼号に次のように記している。

「杞陽先生が亡くなられて、俳壇も虚子の気骨と佛をそのまま身につけている作家を失ったといえる」。

なお、妻昭子（大和郡山藩主柳沢家の出）・長男高忠も俳句をよくし、それぞれに句集『秋桜』（昭和五十八年）・『若葉宿』（昭和五十八年）がある。



写310 京 極 杞 陽

羽子板の眼の艶なるや陰なるや 昭子

いつしかに虚子忌染しと目出度しと 高忠

門下のうちから、四句をあげる。

人も知るつゝじの頃の館やかたかな 宵川

潰ごろの梅たわわなり見て通る ひさお

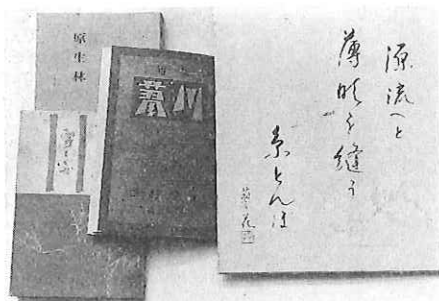
潰けてある柳の束や水温む 茶司

掌てのひらのみかん冷き湯ざめかな 琴江

青玄俳句会と 新俳句『青玄』（主宰伊丹三樹彦）を昭和二十七年に始めて但馬に持ちこんだのは、西村蓼雪線短歌会 花（一九〇二—一九七七）である。句集『蓼川』の他、『但馬文学誌』の著書がある。五十二

年四月の没後は青玄句会は尾崎龍（浜坂）が後を受け、豊岡を中心に継続されている。

源流へと薄明を縫う糸とんぼ 蓼花



写311 西村蓼花作品の色紙と句集



写312 短歌雑誌『雪線』『北雲』『但丹歌人』

まだ 花蓼の群生ゆるす 母なる川 //

つばさ連れて 渡る無言と無一物 //

戦争激化により廃刊を余儀なくされた但馬の歌誌は、終戦後再び芽を吹き、島崎英彦が中心の『多磨』支部会報『白虹』・丸山修三を中心とする『但馬アララギ』・岸秀太郎による『まゆみ』・松井岩男を中心とする『星雲』・藤本啓による『詩想』が発刊された。

これらは数年の間に中絶したが、昭和二十年十二月豊岡の西垣登志宅に山田崇生（香住町）・有本二郎（梁瀬町）・友松賢（久美浜町）らが集まって発起人会を開き、翌年三月『北雲』創刊号を発行した。

これには『さつや』時代のリーダー藤原東川（和田山町）・島崎英彦（港村）・丸山修三（村岡町）らも加わり、号を重ねるにつれて松井岩男（出石高女）・浅田正雄（豊岡小）・榎原太郎（豊岡工）・岡垣徹治（豊中校長）も参加した。この『北雲』が三十四年四月『雪線』と改題されて今日まで続いている。次は『北雲』時代の当市関

係者の代表作である。

幽けさは野にはなつ敵の銃の音身に沁みて寒しその月明かり

島崎英彦

水草は嵐のあとを片寄りて廃川に今朝霧が湧きあつ

足達義夫

吾いまだ神をえ知らず知らざるを悲しみとせず青つげの花

岸野利雄

生きの世にまた会はむ日のありやなし柳絮わた飛び散らふ橋にて別るる

山下道代

『雪線』はあくまで地域的な歌人集団誌として運営され、『アララギ』『多磨』『詩歌』『短歌月刊』『霸王樹』

『高嶺』『創作』『六甲』『龍』など多くの短歌結社から参加して、地域の歌人大衆たちに自由な歌風選択の場を提供した。六十年末現在で通巻四一三号を数え、会員数は三一三名に及んでいる。次は当局関係の主な会員の作品である。

豊岡駅に起りしもの遠く霧震いくる音貨車が連結されぬ

島崎洋二

廃川をいくつも鳥が渡ってゆき泣きたいような真っ赤な夕焼

藤本 啓

あさきゆめさめて漂ふ自在感 波羅密界のごときひかりは

山下道代

喪ひし忘れぬもの多きなか水すましを今日見し水たまり

岸野利雄

戦後の美 昭和二十一年、終戦後の新しい美術活動の第一歩として青踏社は「新青踏社」と改称されて、

術活動 第一回展を開いた。翌二十二年には町役場階上で作品を発表したが、メンバーは柰田たけを・

西垣武雄・島雄健・富森坦二・河原英雄・本井一朗・米田弘・赤木蘇夫二・佐々木猛・佐宗喜久代(和田山)

などであった。この年、豊岡を中心に美術活動はにわか活発となり、山陰美術展・但丹美術展(いずれも公

募)が相次いで開かれ、応募出品数は約五〇〇点に及んだ。新青踏社機関紙『但丹美術』も創刊された。

二十五年には豊岡市美術展が開催されることになり、第一回は絵画・書道・写真の三部門の作品を募集した。第二回展の審査員は須田国太郎、第三回展は小磯良平で、河原英雄と後藤孝三は小磯によって無審査に相当すると認められたので第四回展からは招待出品者第一号となった。

二十六年になって新青踏社が二つに割れて、奈田らの山陰独立クラブと島雄らの草玄会とに分かれた。前者は間もなく解消したが、草玄会は三十五年まで続き、二十八年には新築の労働会館で草玄会展を開いた。

こうした中から新人が育ち、三十四年には、但馬新人七人展に続いて第一回「僻」展が催された。また三十八年には、新人たちによって新しい造形を求めて四人展が、四十年には空間展が開催された。

四十六年には市民会館落成記念として、絵画・書道・写真・陶芸部門の但馬五〇人展が催された。

その後、但馬文教府も四十八年に文教府展(第一回)を開き、但馬の代表的画家二九名の作品を展示した。五十一年には創立三十周年記念として、兵庫県美術家同盟展が開かれ、翌五十二年には但馬信用金庫本店の新社屋で、但馬美術作家展(文教府主催)が開催された。また、この間に個展や遺作展も開かれた。五十二年には豊岡市美術作家協会が結成され、絵画・書道・写真・彫塑工芸の諸団体が合同して、市展とは別に豊岡市美術連盟展を開いた。五十六年にはさらに拡充発展して、美術部門八団体(美術作家協会・チャーチル会・風信書道会・書窓学院・写真サロン・写友会・彫塑工芸会・つちの会)の合同展が開催された。右の中、豊岡チャーチル会は五十二年、市中央公民館が生涯教育の一端として設けた絵画教室(課程は二年。講師は作家協会会員。生徒数七三名)終了生の有志二〇名が結成した会である。美術作家協会は、五十九年に組織を強化して豊

岡市美術協会（会員二九名）と改称した。

豊岡書道界

豊岡書道界の草分けは、大正・昭和初期の小学校教師村尾極外（本名薫）である。当時奈良にあつて新進書家として活躍していた辻本史邑の書道革新運動に共鳴し、昭和五年に寧楽書道会豊岡支部を結成した。昭和六年、書道の画期的指導法として史邑が世に問うた『臨摹兼用小学校書き方手本』はその年、史邑が城崎温泉に滞在して揮毫したもので、この地が昭和初期書道教育革新運動の基地の一つであったといえる。

村尾の没後、素志を継いだ臼田石邨・山本素堂などは末広正治を立てて奔走、十一年には最初の豊岡書道展が豊岡病院大講堂で開催された。

終戦後の書道界は教養としての書道から芸術としての書道へ大きく転換し、教育書道ないし書道教育が軽視されるようになったのを憂い、細川泰翠・畠中麗水・中村喜代松が中心となって全但小中高教員書道講習会を計画し、年一回一流講師を招いて実技指導を行なった。また畠中麗水は二十七年、豊岡市城崎郡中学校書道会を、さらに但馬小学校書道研究会・但馬中学校書道研究会を結成して、教師の実技講習・授業研究の他、書写コンクール・席書大会・書初大会を催すなど書道教育の振興につとめた。

豊岡市美術展には書道部門も設けられたが、五十九年の第三十五回展には一般の部（応募九一）・高校の部（応募一〇五）・小中学生の部（応募二三七四）という盛況であった。

第二節 戦後の豊岡病院

外観と内
容を一新
昭和二十二年『地方自治法』の制定によって十八ヶ町村組合立となった公立豊岡病院は以後、町村合併によって現在は一市九町（豊岡市・日高町・城崎町・竹野町・出石町・但東町・和田町・朝来町・山東町・生野町）の経営に移り、豊岡・日高・出石・梁瀬各病院の他、北兵庫内科整形外科センター（竹田）を運営している。

三十年に円型外来本館を新築以来、各種診療棟・病棟や医療施設・設備の充実に努め、移転後の外観と内容は一新されている。

経営診断
五十九年七月、公立豊岡病院組合が社団法人「全国自治体病院協議会」に依頼していた経営診断がまとまった。

同病院組合は四十六年から五十二年の七年間にわたり準用財政再建団体となり債務が資産を上回ったことがあったが、最近五ヶ年も連続赤字決算を続けてきた。

診断の骨子は、①組合内五病院の連繫強化、②収益の悪い梁瀬病院の北兵庫内科整形外科への統廃合、③豊岡病院結核病棟の廃止、④看護要員の弾力的配置、などである。同組合では診断内容をベースに関係諸団体の代表から成る経営改善審議会を発足させて対策を具体化するとしているが、すでに結核病棟が廃止されている。

表228 但馬地区伝染病患者収容状況

設置主体	市町村	管轄 保健所	管内 人口 (万人)	施設 の 種類	設置 年月	病 床 数	患者収容状況 (年度)					
							51	52	53	54	55	56
公立豊岡 病院組合	豊岡市・日高・ 城崎・但東・ 出石・竹野 各町	豊岡	9.6	併 設	昭和 27・ 3	天日 0	1	1	1	1	2	
						延日 0	4	4	4	13	22	
公立八鹿 病院組合	八鹿・養父・ 大屋・関宮 村岡各町	和田山	4.2	隔 離	42・ 3	2	0	1	25	1	1	
						28	0	5	330	18	15	
矢田川流域 衛生一部 事務組合	美方町・住 香住町・岡 村岡各町	豊岡	2.7	病 舎	47・ 3	17	1	5	0	3	0	
						9	31	0	55	0	0	
浜坂町温泉 町伝染病院 事務組合	浜坂町・温 泉町	浜坂	2.2	病 舎	41・ 3	15	0	0	0	0	0	
						0	0	0	0	0	0	
計	1市 18町		22.4			106	3	6	2	46	4	
							27	35	9	600	64	44

注. 昭和54年の場合、患者のほとんどはハシカである。

伝染病棟 わが国近代化
の統合 過程における

社会衛生に関する試行錯誤の経過は、戦後の経済成長・健康保険医療の普及と充実などと相まって近年、伝染病の発生を大幅に減少させてきた(表228)。そのため五十九年四月一日から、但馬全地区の伝染病棟は公立豊岡病院一ヶ所に統合された。

五十二年十月二十六日、アフリカ南部のソマリアで発生した患者を最後に、天然痘は世界的に発生を見なくなった。五十五年五月八日、第三十三回世界保健機構(WHO)総会

表229 山陰線の急行運行開始表

運行開始年月		急行の名称
昭和26	11月	いずも号(大阪一大社)
29	10	たじま号
31	11	いずも号(東京一大社)
		白兔号(京都一松江)
31	12	ディーゼル車運行(豊岡一米子)
33		だいせん号
35	10	たじま号(ディーゼル準急・大阪一鳥取)
39		まつかぜ号(特急)
40		但馬号(準急・大阪一浜坂)
47	3	はまかぜ号(特急・播但経由)

戦後間もない当時のことで、多額の工事費を見込む全線電化は実現性が薄く、同盟は山陰線「強化」期成同盟と改称、煤煙防止のためのディーゼル車の使用や長距離急行の運行を陳情した(表229)。

四十二年六月九日、但馬一市十八町で北兵庫国鉄複線電化促進期成同盟会(「電化」は五十三年から追加)を結成、四十三年十二月に発足した沿線各府県による山陰線福知山線複線電化促進連盟に加入した。

五十四年十一月二十七日、まず山陰線・福知山線電化が決定し起工式が挙行された。

その後の国鉄の経営悪化の事情もからんで工事は遅れがちで、昭和五十九年末現在で宝塚・城崎間で五二割(五十八年末)、篠山口・城崎間のトンネル十五ヶ所中七ヶ所の電化工事を終えていて、六十一年十一月一日か

で「痘瘡根絶」が宣言され、わが国も法定伝染病から「痘瘡」を削除、種痘も行なわれなくなっている。

第三節 鉄道と空港

戦後の鉄道

昭和二十四年七月、山陰線電化促進期成同盟が発足、山陰線沿線の京都・兵庫・鳥取・島根・山口の各府県が参加した。特に鳥取・豊岡間のトンネルは八一・九ヶ所の路線中三五ヶ所、総延長一六・五キロメートルで路線長の二〇割に及び、全国最高であることを強調し、煤煙防止の必要性を電化促進に結びつけた。

ら運行することになった。

それに反して、六十年一月十日に国鉄が経営改革のために日本国有鉄道再建監理委員会に提出した基本方策中では、ついに宮津線を六十一年末までに廃止することになっている。

この廃止案は同委員会が第三次廃止計画路線に宮津線を繰入れたもので、一キロ当たり一日平均輸送人員（輸送密度）が六十一年までに二〇〇〇～四〇〇〇人の枠内のものを対象としている。宮津線の輸送密度は四十年で五六〇〇人であったものが、五十八年度には二五八三人に落ち、営業係数四五五、年間損失四二億七六〇〇万円に及んでいた。

沿線三市一〇町で構成する宮津線問題対策協議会は、現実には廃止となれば北但馬・北丹後地方の過疎化の促進にもつながるとして、存続を訴えている。

但馬空 港計画

懸案の但馬空港計画は最近、県の航空輸送計画の一環（『兵庫県二〇〇一年計画』答申）として

①来日岳南側の豊岡市・城崎町境界付近、②但馬文教府南部付近、③豊岡市・日高町境界付近の三ヶ所を空港用地候補地として上げ、航空法に基づく三ヶ年の気象観測が五十九年十月一日から③地区で開始された。気象調査の他、地質調査などの結果、最終候補地を決定し、使用機種などの運航計画を立てた上で、早ければ六十七年度開港を目指して運輸省に働きかけるとしている。

第八章 戦後の街づくり

第一節 新住居表示

住居表示の変更 昭和初期の耕地整理区域内外で残された旧町域の地名と整理後につけられた新地名（表113参照）は、昭和三十七年五月の『住居表示に関する法律』にもとづいて四十二年十二月一日に施行さ

れた新住居表示によって、旧地名では「小田井」「加広」、新地名では「元町」（ただし、適用区域は違ってゐる）だけを残して消えた。新々地名は他に、幸・若松・大手・千代田・泉・中央・山王・京・城南の各町がある。

新住居表示というのは、従来のように字名と地番号を用いないで街区符号（街区名と番号）と住居番号によるもので、地番号が複雑に錯綜している実状に鑑み、住居表示の改善を目指したものである。現在、戸籍法上は本籍の表示には地番号と、住居番号を除く住居表示の街区符号番号を併用し、登記法上は地番号に限定しているが、旧来の「字」表示は「街区符号」表示に切り変わったのである。

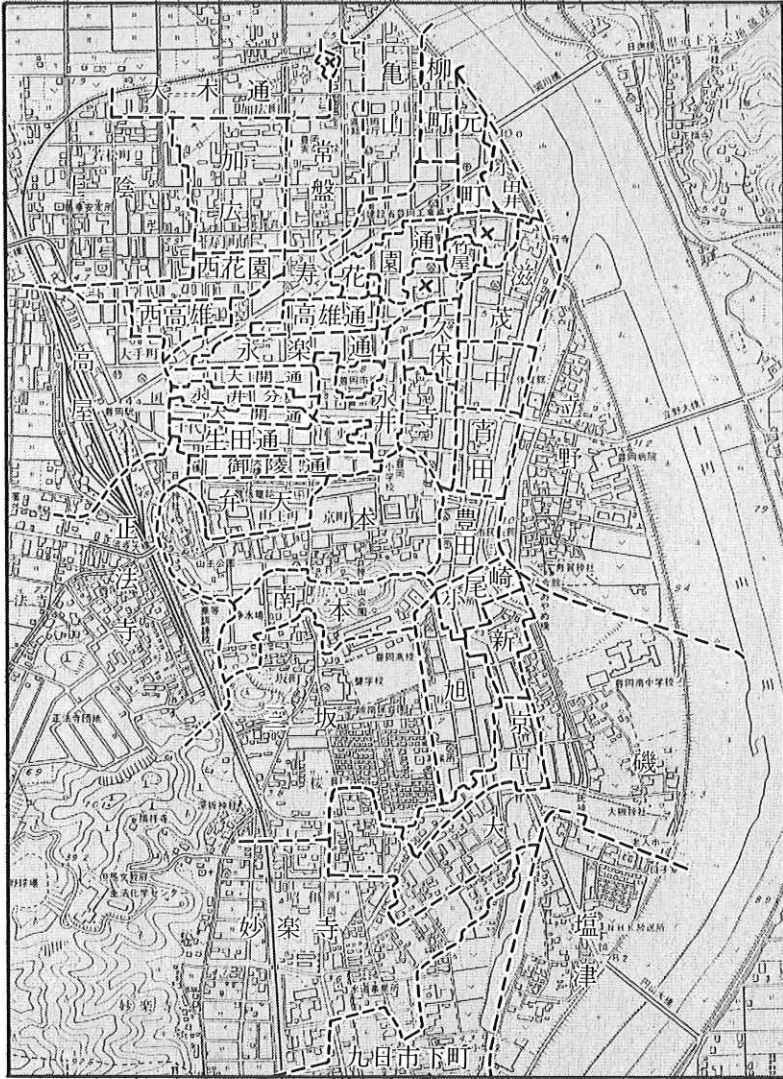


図19 新住居表示施行前の大字名と区画
(地図は現行のもの)

「新屋敷」は飛び地となって分散、特に大字名を入れていない(×印)。

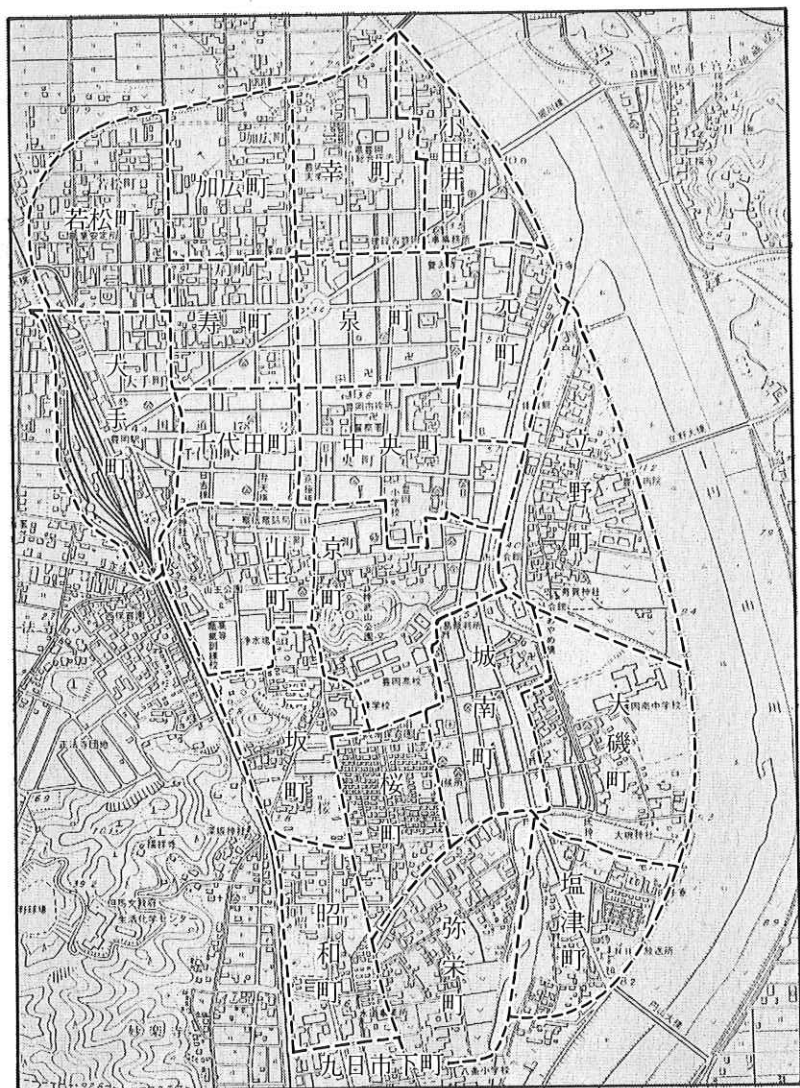


図20 新住居表示による町名と区画
(地図は現行のもの)

消えた歴 消えた地名のうち「仁倉」「野田」「上古淵」「河原田」「岸陰」は河原名または付随する地形・

史地名 地質を、「隈中(熊中)」は突出した地形を意味した。「野田」はまた、中世末の「野田」合戦に

名を残し、「新屋敷」「滋茂(下)」「中」「宵田」「寺」「小尾崎」「竹屋」「久保」「新」「京口」は豊岡城下町の形成と深く関わっていた。「永井」は起源を遠く鎌倉ご家人に遡ることができるという。

小田井を核として設定された近世初期の新城下町形成計画は、南に向けて「下町」「中町」と伸び、城地に接するところで「宵田町」となった。配列上からは「上町」であるはずなのに、なぜ「宵田」となったのかは分からない。「宵田」は全国的に見て稀少な地名で、日高町・出石町・豊岡市に集中している。日高町の場合は宵田城(山名氏四天王の一・垣屋氏が築いた)とその周辺部、出石町の場合は有子山城下の垣屋氏邸宅跡を「宵田」と呼んでいる。中世、豊岡には垣屋氏の亀城があった(『豊岡誌』)といい、それは福田地区の亀ヶ崎城とされてはいるが、むしろ宵田地区や南側の城山に「上町」を排しても「宵田」とするだけの垣屋氏との強力な由縁が暗示されるのである。

「寺町」は文字通り来迎寺や立正寺、後に自性院が並んだ寺院筋で、「裏町」とも呼ばれた。

残された町名の「元町」は、まず耕地整理後の新町名として小田井の一部に付けられたが、小田井を含めたこの地区が豊岡城下町成立前の豊岡町の原点であったことにふさわしい命名であった。住居表示変更後の「元町」は旧「元町」に至る道筋として元町通と呼ばれたことに起因するが、城下町時代の町並みの中心「中」「滋茂」「新屋敷」「竹屋」を取込んでいて、前者は近世城下町成立前の、後者は現市街成立前の、ともに「元」の町であった沿革からの命名とするのにふさわしい。

耕地整理と住居表示変更によって旧町域の歴史地名はほとんど姿を消した、というこの事実は看過されるべきではない。全国的に見ると「地名もまた文化財である」として、歴史地名を残すための訴訟までが提起されている中で、旧町域では地名に対する認識や郷愁的執着はほとんど見られなかったといえよう。

幸いにして残った「小田井」は、既述のように小田井あがた神社にかかわる古代以来の地名で、豊岡町の原点であったという因縁がある。

旧町域を除く旧村部は地区の一部が住宅街化にともなって新町名（弥栄町・桜町・昭和町）になっているもの、かつての村名が街区符号として維持されている（ただし、「栄町」の成立によって馬路と南谷の地名が消えた）。「正法寺」だけが現山王山上にあった寺院名をとって江戸前期に新開の地名とした他は、いずれも中世以前に遡る由緒を持っている。また、耕地整理時と同様に町内会名には地区名の旧称と区域が維持されているところが多く、街区名と町内会名は必ずしも一致しない。

第二節 都市計画

用途地域 昭和二十五年四月の市制施行と同時に、豊岡市は建設省の認可を受けて全市域を都市計画区域の**決定**とした。三十三年に上佐野地区が編入され、現市域が定まった時点で、都市計画区域の区域変更を行なった。四十三年には用途地域決定を行ない四十九年には特別工業地区を決定した。用途地域決定は建築基準法の一部改正によって四十八年に変更、さらに五十六年に現行のものに再変更した。

更を行なった。四十三年には用途地域決定を行ない四十九年には特別工業地区を決定した。用途地域決定は建築基準法の一部改正によって四十八年に変更、さらに五十六年に現行のものに再変更した。

表230 都市計画公園

(昭和61年8月31日現在)

種別	公園名	位置	計画決定面積	開設済面積	決定年月日	適用
児童	ひまわり公園	中央町・京町	0.10 ^{ha}	0.10 ^{ha}	昭和46.3.1	
〃	すみれ公園	妙楽寺	0.12	0.12	48.1.24	
〃	なでしこ公園	妙楽寺	0.10	0.10	48.1.24	
〃	桜町公園	桜町	0.05	0.05	51.1.23	
〃	めぐみ公園	京町	0.15	—	51.1.23	未着手
近隣	山王公園	山王町	1.0	0.60	(28.3.31) 51.1.23	未完成
〃	神武山公園	京町	2.7	2.7	45.2.3	
総合	中央公園	立野町・中央町 京町・大磯町 城南町・塩津町 弥栄町・今森	14.6	2.2	56.3.13	未完成
運動	丸山公園	正法寺・戸牧	8.9	4.4	51.1.23	未完成
特殊	玄武洞公園	赤石	75.0	4.5	31.1.14	未完成
〃	日和山公園	瀬戸	32.4	7.2	27.3.31	未完成
合計	11ヶ所		135.22	21.97		

注 1. 公園は別に任意公園として、寿公園・円山川公園がある。
2. さらに 大師山自然公園を着工、61年に完成。

表231 都市計画緑地

(昭和61年8月31日現在)

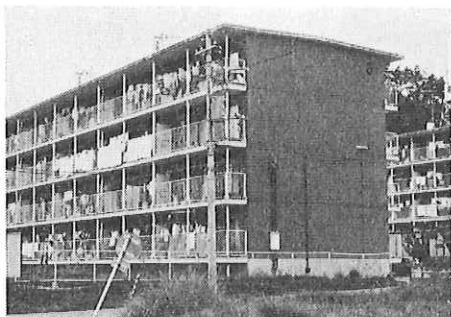
名称	位置	計画面積	供用面積	決定年月日	備考
南陵緑地	山王町・三坂町・京町	0.3 ^{ha}	0.12 ^{ha}	昭和51.7.10	未完成
大磯緑地	大磯町	0.21	—	昭和56.3.13	工事中
合計	2ヶ所	0.51	0.12		

公園・緑地 都市計画公園・緑地の整備も進んでいるが、公園については昭和五十九年末現在で計画決定面積中の開設面積は十六割、緑地は二三割強が完成しているにすぎない。(表230・231)。

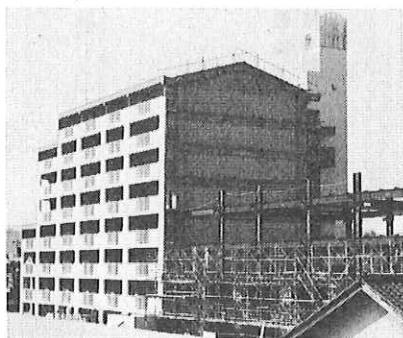
別に大師山自然公園は、引野の大師山に造成するため古墳などの調査を終え、別に述べる「豊岡市二十一世紀街づくり構想」による大師山・三開山自然公園計画の一環として、大師山は市独自の二ヶ年事業で六十年開園した。

逆に自然を破壊したり古代・中世遺跡の無視につながってはならない。共存を計るために、大師山公園計画では古墳の文化財指定や出土品の展示の他、保護にも意を用いている。グラウンドと芝生広場からなる円山川スポーツ公園は昭和六十年七月から開園した。

住宅対策としては、塩津・今森・森・愛宕山・高屋・一本松・津居山・栄町に市営住宅が建設され、宅地も正法寺・城上・高屋・戸牧第一・同第二団地などが市によって造成された。六十一年から六十二年にかけての計画で高層八階建て、公営では但丹で最初という市営住宅も塩津に建設された。



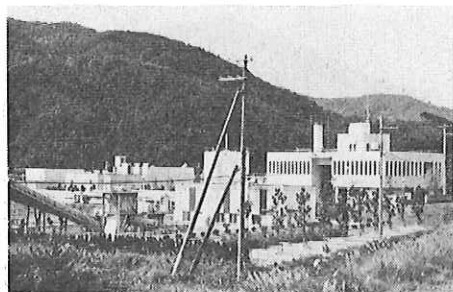
写313 栄町団地



写314 建設中の高層市営住宅

県は全県全土公園化計画を打ち出しているが、財源的には未定の現状であるので、県案を先取りする市の独自事業の意義は大きい。また、「二十一世紀構想」が単なる掛け声でないことも実証するわけで、大師山公園の完成と運営の成果が期待される。

大師山公園にしても三開山にしても、市内有数の群集墳や中世城郭跡の所在地である。「自然」との関わり合いが、



写315 一日市下水処理場

下水道 市の公共下水道事業は四十六年に計画決定をしたが、四十八年には処理場敷地拡張の計画変更を行なっている。事業認可は四十六年九月、面積約三〇六・八畝、計画処理人口三万一〇〇〇人である。

第一負担区の供用年度は昭和五十七年度から六十年年度、面積約一三〇畝・計画処理人口一万三〇〇〇人で、すでに大半の供用が開始されている。

第二負担区の供用年度は昭和六十年年度から六十六年度、面積約一二七・五畝・計画処理人口一万一四〇〇人が見込まれている。

排除方式は分流式、処理方式は標準活性汚泥法で、処理能力は一日に二万六〇〇〇立方メートル。一日市地区に公共下水道一日市下水処理場を置く他、汚水中継ポンプ場二ヶ所を予定している。

第三節 道路

戦後の道路開発 戦後の経済成長はモータリゼーションの時代をもたらしたが、それは当然、道路整備と併行する関係で進展するとともに、

生活様式にも大きな変化を与えている。現在の市内道路敷設状況は「表232」／「表233」のとおりであるが、新路建設・幅員・舗装などによる整備状況を、

表232 豊岡土木事務所所管道路表

(関係分。昭和59年12月現在)

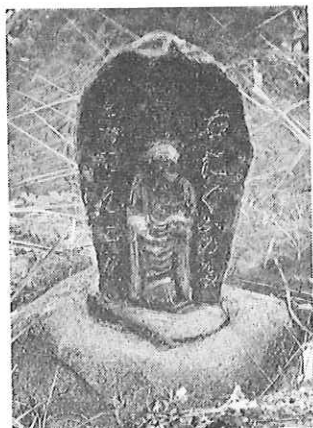
区分	路線番号・路線名	基 点	終 点	經由地及び備考
一 般 国 道	178号	舞 鶴	鳥 取	河梨峠—下宮—森—下陰 —福田—江野—(竹野) 途中、大開通で複線
	312号	姫 路	豊 岡	佐野—塩津—立野大橋 —鎌田—下宮 (登尾峠)—出石—江本 —塩津—大開通—下陰 円山大橋・立野橋間は312 号と重複
	426号	福 知 山	豊 岡	
主 要 地 方 道	日高・竹野線	日 高	竹 野	船谷—辻—目坂—(床瀬)
	豊岡・港線	豊 岡	港	立野橋—小田井—一日市 —(城崎)—瀬戸
	香住・久美浜線	香 住	久 美 浜	三原—畑上—気比—小島 —瀬戸—(田久日) (片間)—中郷—(上郷)
一 般 県 道	出石・村岡線	出 石	村 岡	
	津居山・港線	瀬 奥	戸 野	津 居 山
	奥野・但馬三江停車場線	奥 野	但 馬	三 江 駅
	竹野・久美浜線	竹 野	久 美 浜	祥雲寺—鎌田—下宮 (飯谷)—畑上—気比—田結 畑上・気比間は香住・久美 浜線と重複
	下宮・六地藏線	下 宮	六 地 蔵	途中、但馬三江駅までは奥野 但馬三江停車場線と重複
	永留・豊岡線	永留(京都府)	豊 岡	奥野—駄坂—木内—円山 大橋
	辻・福田線	辻	福 田	
	香住・大谷線	香住(豊岡)	大谷(出石)	立石—倉見—(安良)
府市場・伏線	府 市 場	伏	上郷—中郷—下加陽—伏 途中、出石・村岡線と重複	
一 般 道	口小野・庄境線	口 小 野	庄 境	田多地—倉見—上鉢山 —木内—庄境 途中、香住大谷線及び永留 ・豊岡線と重複
	戸島・玄武洞・豊岡線	戸 島	豊 岡	(結)—赤石—森—堀川橋 途中、田鶴野地区では複線

表233 都市計画道路

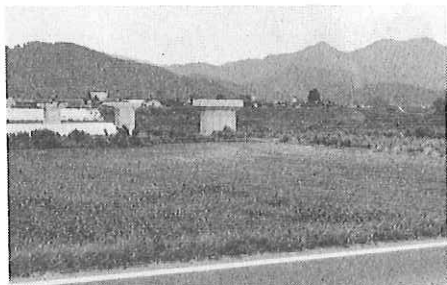
道路名称	告示年月日	起 点	終 点	幅員	延長	管轄	備 考
大磯線	(28.5.19) 51.1.23	塩津町	城南町	12	1,400	市道	未着手
塩津高屋線	51.1.23	今森字下河原	下陰字船山	16	4,380	〃	〃
下陰線	(28.5.1.19) 51.1.23	高屋字金山通	高屋字金山通	18	240	〃	〃
駅裏線	51.1.23	大手町	一日市毘沙門	16	1,650	〃	工事中
大開線	(28.5.19) 51.1.23	大手町	立野町	15	1,250	国道	
豊岡駅線	(28.5.19) 51.1.23	九日市上町字下河原	一日市毘沙門	12	4,450	国道 県道	
塩津元町線	(28.5.19) 53.3.15	大手町	城南町	12	1,690	市道	工事中
大門線	(28.5.19) 51.1.23	昭和町	九日市上町字下河原	12	1,310	〃	
京極南線	51.1.23	山王町	高屋字神田	12	810	〃	
正高寺線	51.1.23	大手町	上陰字内田	12	810	国道	
豊岡陰手井線	51.1.23	若松町	小田井町	12	1,180	市道	一部改良済
大小田井線	(28.5.19) 51.1.23	泉町	船町字四ツ街	12	700	〃	改良予定
常盤線	(28.5.19) 51.1.23	下宮字森友	福田字池の内	12	4,340	国道	
下宮下陰線							

大開通りの他に二、三しか舗装されていなかった戦前の実情と比較するとき、まさに雲泥の差と言わざるを得ない。

昭和二十八年三月、都市計画に基いて街路計画を立てて認可を受け、最終的には五十一年一月（大門線は五十三年三月）に告示した。現状では未完成であるが、塩津・高屋・下陰線は九日市を起点に妙楽寺・戸牧間をトンネルで結び、駅西を南北に抜けて下陰に達し、大開通りから豊岡駅敷地を地下道または高架で抜けることを将来に託した駅裏線と高屋で連結することになる。完成のときは鉄道以西部の飛躍的な発展に繋がるはずである。



写316 森尾橋のたもとに立つ道標「右おくの(奥小野)道」と読める



写317 工事中の蓼川大橋の橋脚
向う側が土洩地区(昭和59年9月写す)

この他、但東町・出石町を連ねる計画県道と豊岡市神美地区・新田地区・

中筋地区を結んで円山川西岸に至る広域農道が計画されていて、出石川・

六方川・円山川に架橋、土洩地区から直接、国道三二二号線に連結する。

枝線として六方田圃を南北に貫くものもある。兵庫県豊岡土地改良事務所

が広域営農団地農道整備事業として行なうもので、すでに蓼川大橋(円山

川)・五条大橋(出石川)・六方川一号橋・同二号橋など橋梁の名称も決ま

つていて、蓼川大橋は橋脚と取付道路が完成している(写317)。

ここで忘れてならないのは「むかし道」の存在と現況である。

むかし道とは、われわれの先祖たちの生活と結びついてい

た「文化財」と言っても、比較的最近まで、少くとも戦後しばらくの間

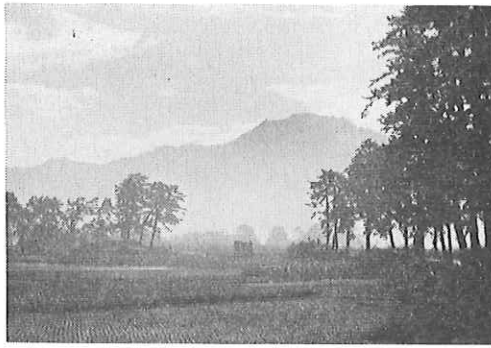
まで利用されていたが、現代的な道路の新設・整備によつ

て忘れ去られ、荒廃して消え行こうとしているものが多い。

その現況には、次の場合がある。

① むかし道そのものが、現代的に改修されて利用されている場合

② 主として峠道や山麓沿いのもので、新設道路に置き代えられたり、利用・管理を離れて自然化し、消滅あ



写318 出石街道松原（大正時代。出石町水上付近）
正面は有子山

るいは消滅しかかっている場合

③ 開発や埋立てによって、直接あるいは間接に消滅、あるいは消滅しかかっている場合

市街地や集落を結ぶ生活道路などは、①の例が多い。拡幅や舗装によって往時の面影を留めないものがあり、地形などによって不規則に湾曲するなどの特徴がある。豊岡市街の道路の多くは耕地整理によって整備されたが、条里制地割を基準としたため直線を維持しているものがある。市道花園線はかつての陰（奈佐）道であるが、既述のように江戸時代以来の主要道であって、しかも条里地割に沿って直線を維持してきたものである。

現在も、国道一七八号線と主要地方道豊岡港線の連絡線として機能している。

②の例も多い。今後、その数を増していくことになろう。単なる山道や里道であったもの他、旧県道であったもの、今なお市道として登録されているものもある。森尾地区から出石町奥小野に抜ける峠道は市道森尾山ノ神線であるが、中央の峠部で消滅してしまった。森尾口の舟光背地藏石碑の道標には「右おくおの道」と刻まれ、奥小野側の峠口にも「左もりを」の道標が残っている。ともに幕末期のものと思われる（写316）。

金剛寺地区から畑上地区へ抜ける市道金剛寺畑上線は、途中で分かれて河梨峠へ向かう。その分岐点に残る道標には「右丹後道。左畑上」

とある。昭和八年七月に地元の青年団が建てたものであるが、おそらく再建されたものであろう。河梨道も消滅しかけている。

③の例もまた、最近の新道整備や開発などの推進によって増加している。

高屋地区から岩井地区へ抜ける旧道は、峠口で口岩井道と奥岩井道に分かれていた。今も道標が残っている。市道正法寺岩井線の新設によって、口岩井道は消滅しかけているし、奥岩井道は岩盤を貫くユニークなトンネル（大正期に地元の手でくり抜かれた）が埋められて消滅した。

江本地区から六方田圃の中央を南北に貫く市道五条線は、かつての出石街道である。円山川東岸の国道四二六号線と交替して、現在は完全に農道化している。

佐野地区から南下して八代川河口部と山陰線にはさまれる市道八条線は、往時の豊岡街道であり県道豊岡神戸線として昭和十一年の円山川改修によって本流であった部分が八代川となった後も、なお主要道であった。

全国的に見ても貴重な一里塚の遺風を今なお残している（『豊岡市史』上巻）が、改修後の円山川西岸堤防上を走る国道三一二号線にとって代わられた。

港 大橋
明治二十二年四月の町村制施行以来、円山川河口部によって両断されていたままの港村にとつて、二分されていることによる東西両地区の対立を解消し、一体化して地区の発展を期待するために、円山川架橋は年来の夢であった。

大正十五年九月の渡船の県営請願によって、一人三錢・往復五錢の個人経営渡船は無料の県営に切り代わったものの、自動車輸送による連絡は断たれたままで三原峠經由の丹後との往来にも制約があり、広域的にも発

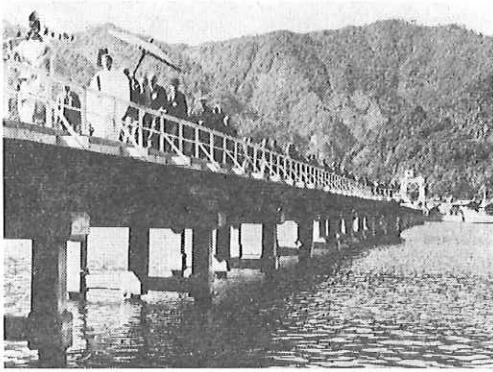
展を期待することはできなかった。戦後になってからも、港西小学校に併設された新制中学校へ渡船で通う港東地区の一生徒が転覆によって水死したことがあった。

終戦を待つように昭和二十年十二月、港村は県知事あて陳情したが二十四年十一月には『円山川架橋促進委員会設置規程』を制定、二十七年三月からは『円山川架橋資金蓄積条例』によって毎年村費五〇万円及び指定寄付金などを積立てるに至った。

同年十一月には『道路法』第二十七条によって、架橋部を村道（小島外浜八六六番地・気比絹巻三六七六番地間三二〇㊦、幅三・六㊦）に認定、橋銭を徴収する賃取橋梁の建設を県に申請、同月二十九日に認可された。

橋銭は歩行者三円・自転車三円・リヤカー五円・荷車一〇円・牛馬車四〇円・自動三輪車六〇円・乗用自動車八〇円・乗合自動車一五〇円・貨物自動車一五〇円で、各車輛に付随する人員には料金不要であった。三十年四月一日から四十二年三月三十一日までの十三年間を徴取期間とする他、一年後の三十一年四月一日以降は牛馬車と自動車以外は料金を免除することとした。

積立て一年目の五〇万円以外に資金はなかったが、二十七年十一月に大蔵省資金運用部から一八〇〇万円の借入を決めた。翌年十月、借入議決を変更して郵政省簡易保険資金から一五〇〇万円を起債、別に



写319 旧港大橋渡り初め式（昭和29年10月16日）

農林漁業資金から一二五〇万円を借りた。

二十九年四月に着工、十月十五日竣工、翌十六日に渡り初め式を行なった。供用開始は十一月十日である。一部に船舶通過用の可動部をとり入れた橋脚コンクリート・パイル・木造土橋三四連・中路鋼製桁橋であった。

三十年三月二日には県営渡船が廃止されたが、前年十月二十日には廃止に伴い不要となる経費を架橋事業債の償還に充当するよう県に陳情している。結局、三十四年に県道に編入された。

三十六年九月、第二室戸台風によって絹巻側を一部流失、国の災害復旧工事に認定されたのを機会に全面架け代えとなり、三十八年に起工、四十二年七月十九日に竣工した。現在、可動橋は使用されていない。

港大橋の架橋は、三十年四月一日の豊岡市との合併や主要地方道の香住久美浜線・豊岡港線、一般県道の竹野久美浜線の改修とも呼応して、港地区の発展に大きく寄与してきている。

第四節 円山川・津居山港修築

昭和二十一年に津居山港修築工事起工、二十三年には津居山港改修促進期成同盟会が発足した。
津居山港

二十八年からは港湾法三十三条一項による兵庫県管理港湾となった。三十一年、鉾山専用上屋が完成して鉾石積出船が就航、四十年には気比浜内に貯木場が完工して外材船が入港した。

しかし、特に戦後の輸送事情は陸運に重点が移り、鉄道未通という最大のハンディをかかえた津居山港の今後は楽観を許さぬものがある。六十年十二月の兵庫県の総合計画審議会の「兵庫二〇〇一年計画」答申案の

「基本計画」には、津居山港についても外貿定期船が寄港できる国際港湾として拡充整備、日本海側の玄関口として、水産物・農産物・製造業製品の流通基地として、その港湾づくりを目指した整備を継続する、としている。この計画は、日本海沿岸縦貫道路・播但連絡道路・日本海太平洋連絡道路・国鉄山陰線の電化・播但線の複線電化・但馬空港などの諸計画と組んで、陸海空にわたる基幹交通網及び域内幹線交通網の整備を通じて内外にわたる総合交通体系の確立を図ろうというものである。

これらの構想は、すでに「豊岡市基本構想」の骨子をなして、地域の構想を県として総合的な基本計画の中に取り入れて実現を期している。

円山川改修

二十四年八月二十四日、豊岡町・日高町・城崎町など十三ヶ町村で円山川下流第二次改修促進期成同盟を結成した。「下流」と銘打ったのは上流部改修組織と併立しつつ提携するためであった。九年の室戸台風で打撃を受けた上流部にも改修の機運が生まれたが、戦時下への突入で請願は無視され結局、十九年になって八鹿町他六ヶ町村が円山川改修工事期成同盟組合を結成した。改修が具体化したのは戦後である。

二十四年九月、下流同盟は円山川増補工事促進期成同盟会と改称、改修は建設省直轄改修工事として一日市護岸や左岸かさ上げ工事が行なわれた。

四十一年四月十五日、円山川は一級河川に編入された。

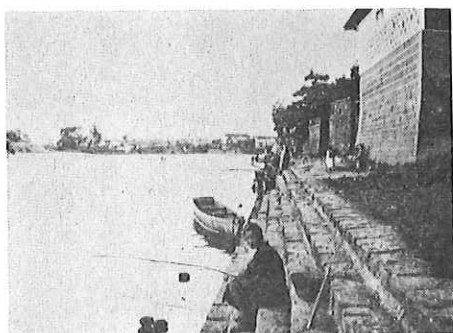
廃川

市内を貫流していた円山川本流中、改修によって廃川となった部分のうち、流水部を除く廃川敷約一四・五畝は昭和十七年ごろ国から譲渡された。ここに内水処理排水ポンプ場が設置され

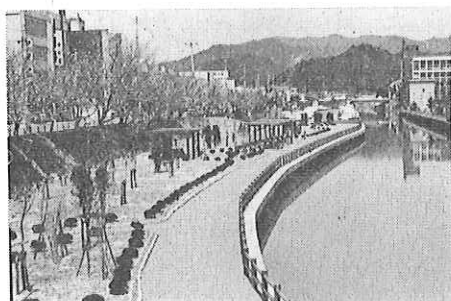
も激変した。

その後、円山川廃川の浄化・廃川敷の利用計画が進み、四十三年以来公園その他の公共施設を含む利用計画を立て、河道整正・環境美化に着手、四十六年七月には都市公園としての充実を計ることになった。八月には直轄河川都市河川環境整備事業計画（建設省）による「円山川水系旧円山川浄化事業」として四十七年から五ヶ年計画で汚泥七一〇〇立方尺の浚渫・ポンプ方式による導水路浄化用水の導入が行なわれた。

現在の廃川敷は市の中央公園の一区域としての整備が進められているが、すでに市民体育館・市民会館・福祉会館・市営駐車場の他、市農協会館が建設されている。



写320 本流であったころ（大正期）の円山川（現・廃川）宵田裏のイト



写321 公園化が完成した市民会館前の廃川部（昭和61年4月）

たが、特に立野橋周辺のいわゆる「廃川風景」が街に与えてきた情趣の深さは、詩歌や絵画の題材として数多くの作品を生み出した事実によって推察できる。

廃川に何釣る人ぞ 秋の風

虚子（既出）

時代の変遷は、廃川を下水路化しBOD（生物酸素要求量）一八PPmを超えるに至ったし、周辺の景観

第九章 豊岡市の課題

人口と産業
構造の変遷

豊岡市域における明治二十五年（一八九二）から昭和二十五年（一九五〇）までの約六〇年間の旧村別人口の変遷を見ると、全域では人口は漸増していて、旧豊岡町と五荘村は他町村からの流入、他の八条・三江・田鶴野・新田・中筋・奈佐・港七ヶ村は自然増、のそれぞれに支えられた緩やかな増加である（表234）。

旧豊岡町は明治九年八月の改置豊岡県廃止による県庁の撤去にもかかわらず、その後の柳行李・カバン産業の振興と、鉄道の敷設、中・女学校の設置、官公庁の充実が相まって但馬地方の中核都市としての機能を整えてきた。五荘村の人口増は高屋地区に明治四十二年に豊岡駅が設置され、駅前地区が市街地化して、豊岡町の市街と一体化したことによるものである（表235）。

昭和十年代、戦時体制下に入ると軍需産業労働力として農村から都市への人口流出が見られ、豊岡町・五荘村以外は人口が減少した。

戦後は居残った疎開者や引揚者・復員兵士などで一時的な人口増加現象があったが、農村部人口は、すでに昭和に入ってから徐々に減り始めていたといえる。

昭和二十五年の朝鮮戦争による「特需景気」・三十年を中心とする「神武景気」・三十四年を中心とする「岩

表234 年代別、市域内旧町村別人口推移

旧町村 年代	豊岡	八条	田鶴野	三江	五荘	新田	中筋	奈佐	港	神美	計
明治25	6,028 ^人	1,694	2,401	2,017	2,955	内立野312 2,254	2,792	2,384	3,761	?	26,287
38	7,220	1,725	2,519	2,221	2,861	2,293	2,985	?	?	?	?
大正9	9,034	1,849	2,352	2,402	3,037	2,464	2,638	2,135	3,920	?	29,831
昭和5	11,918	1,944	2,293	2,107	3,590	2,515	2,696	2,024	4,118	?	33,205
10	14,593	—	2,222	2,112	3,696	1,999	2,537	2,057	4,060	?	33,276
15	15,032	—	2,171	2,064	3,705	2,074	2,565	2,002	3,921	?	33,534
22	21,694	—	—	—	4,423	2,221	2,943	2,264	4,738	?	38,283
25	15,511	1,495	2,457	2,416	4,508	2,308	2,982	2,268	4,838	?	38,783
30	16,178	1,871	2,475	2,552	4,592	2,575	2,898	2,196	4,709	2,410	42,456
35	16,743	1,749	2,357	2,557	4,691	2,799	2,697	2,064	4,598	2,314	42,569
40	17,358	1,942	2,270	2,392	5,574	2,755	2,516	1,867	4,491	2,094	43,259
45	16,964	2,222	2,232	2,525	6,672	3,063	2,356	1,742	4,355	1,963	44,094
50	16,288	2,552	2,245	3,011	8,380	3,493	2,356	1,669	4,333	1,883	46,210
55	15,124	3,041	2,174	3,937	9,518	3,560	2,428	1,578	4,214	1,883	47,457
60	13,709	3,539	2,139	4,275	10,414	3,711	2,376	1,548	4,111	1,889	47,711

注：神美村と大字上佐野は分村して豊岡市と合併したもので、分村分の人口統計がないので、合併時までは除外してある。

戸景気」などに支えられて、わが国の鉱工業生産が急速に伸展し、モーターリゼーション・情報化・流通革命の四十年代を経て国民総生産（GNP）が米国に次いで世界第二位にまで成長すると、この間に産業構造は急速に変革された。

農林漁業（第一次産業）人口が激減し、鉱工・製造・建設業（第二次産業）や小売・サービス業など（第三次産業）の人口が増えて、第一次産業を主体としてきた但馬地方は人口が減り始めた。いわゆる「過疎化」し始めたのである。

その中で、ひとり人口漸増を続けているのが豊岡市である。産業構造変革の中で、八条・五荘地区に市街地が拡張され、四十年代後半からは円山川を東に越えて新田・三江地区も市街化が進行、市営住宅建設や分譲宅地造成がその相乗作用を生み出した（表234）。

同時に市域内でも過密・過疎の地域差を生み、

表235 豊岡市の産業別人口の推移 単位：人

産業	昭35年		昭55年	
	人口	%	人口	%
農業	7,901	37	2,811	12
林業・狩猟業	38		12	
漁業・水産業	419	2	352	1
第一次産業計	8,358	39	3,175	13
鉱業	28		16	
建設業	899	4	2,080	9
製造業	4,069	19	5,597	23
第二次産業計	4,996	23	7,693	32
卸売業	3,517	17	6,165	25
小売業				
金融・保険業	361	2	734	2
不動産業				
運輸・通信業	996	5	1,162	5
電気・ガス業	160	1	229	1
水道				
サービス業	2,369	11	4,544	19
公務	514	2	696	3
第三次産業計	7,917	38	13,537	55
分類不能	6		7	

五十年代に入ると旧豊岡町域に始めて人口減少を生じ、大都市並みの人口ドーナツ化現象が起き始めている(表234・表235)。

このような人口現象の分析が、今後の都市計画に生かされ、「二十一世紀構想」に盛り込まれているのである。

将来へ 豊岡市の歴史は、ぼうばくとして遠い幾千、幾万年の昔から始まる。谷間と低湿地、霧と雨との展望 雪という豊岡盆地特有の気候と風土の中で、私どもの祖先は耕地を開いて米をつくり、川や海に舟をこぎ出して漁をし、湿地に柳を植えて柳行李を編んだ。円山川の舟運の便から市場が育ち、城下町が形成された。

明治になって、一度は豊岡県庁の所在地となり、官公庁・病院・学校がつけられ、鉄道が敷設された。大正・昭和初期の間に上水道・円山川改修・区整画理・国鉄宮津線敷設などの大事業が北但大震災を克服しつつ進められ、ここに但馬の中心都市としての地位を不動のものとした。養蚕業が盛んになり、一方では杷柳製品・ファイバー靴の主産地ともなった。

活動についても、但馬の商業販売額中で豊岡市の占める割合が、昭和三十七年の五三・八割から、五十四年に

市制施行時三万二〇〇〇人の人口が、五万人にとどかんとする規模にふくれ上がった。

表236 五荘地区集落別世帯数、人口の推移

	昭和14. 9		30.10. 1		60.10. 1	
	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
正法寺	20	93	37	157	386	1,182
戸牧	59	281	61	336	376	1,325
高屋	52	221	68	322	603	1,801
駅前	176	857	220	1,075	340	1,032
上陰	50	248	92	408	163	524
中陰	48	228	53	269	212	696
下陰	22	94	28	148	601	2,148
福田	70	370	76	447	163	702
栃江	32	160	37	185	44	188
小計	529	2,552	672	3,347	2,888	9,598
森津	61	323	66	418	58	295
滝	21	94	19	102	17	75
新堂	14	76	14	77	16	75
岩熊	21	103	22	127	18	81
江野	73	329	69	394	57	245
伊賀谷	18	79	24	127	15	45
小計	208	1,004	214	1,245	181	816
合計	737	3,556	886	4,592	3,069	10,414

表237 65歳以上人口指数表
(昭和59年10月1日現在)

地区	老人指数	地区	老人指数
港	14.0%	神美	17.4
田鶴野	15.0	中筋	16.9
五荘	8.5		
三江	8.7		
豊岡	13.3		
奈佐	19.0		
八条	11.5		
新田	9.6		

● 豊岡市市民憲章

円山川の美しい自然と豊かな伝統のなかに
生きるわたくしたちは、 真実を愛し平和を願
い、大きく未来に羽ばたく豊岡の市民として、
その誇りと責任を胸にこの憲章をさだめます。
一、健康で働くことに生きがいを感じ、活気
あふれる豊かなまちをつくります。

一、子どもの夢や若い力を伸ばし、老人を敬
う暖かいまちをつくります。

一、進んで環境をととのえ、清潔で安全な住
みよいまちをつくります。

一、たがいに人として認めあい、真心と親切
で結ばれた明るいまちをつくります。

一、スポーツに親しみ芸術を愛し、文化のか
おる楽しいまちをつくります。

昭和四十七年四月一日制定

。交通安全都市宣言

昭和三十七年一月二十五日

。世界連邦平和都市宣言

昭和四十二年三月二十二日

の宣言
三つの
(市議会決議)

。衛生文化都市宣言

昭和四十三年九月二十八日



写322 ホテル・サンルートから町並みを見る
右は但馬銀行本店。左は市庁舎

は四〇・二割と比重低下を起しているのである。
豊岡市産業の活性化は緊要な課題となってきた。
いま豊岡市では、立石地区に造成中の中核工業
団地の分譲が始まったが、円山川や国道一七八号
線の改修・公共下水道の整備・広域農道の建設・

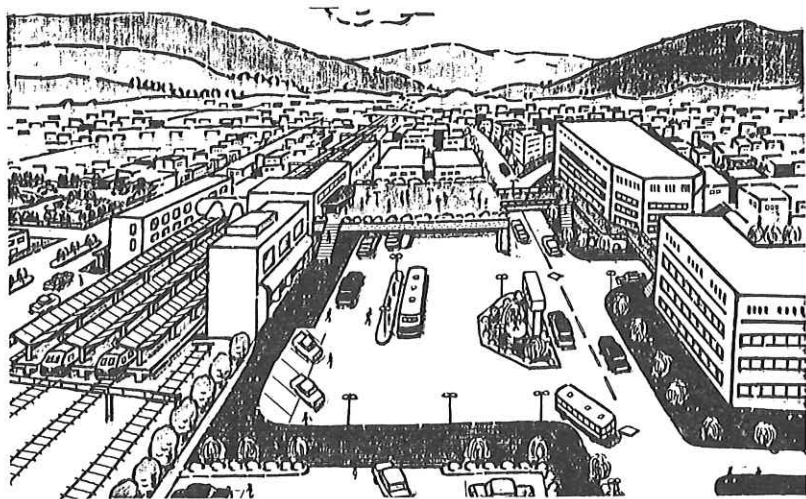


図21 豊岡駅前再開発のマスタープラン

国鉄山陰本線の電化・但馬空港の調査など一連の事業が
本市発展の気運を盛り上げている。

豊岡市が昭和五十一年に策定した「豊岡市勢振興基本



写324 現豊岡市長
平尾源太夫



写323 第2代 豊岡市長
橋本省三(名誉市民・故人)

「構想」は、「自然と文化と産業の調和した北兵庫の中核都市」をめざす一〇年計画であった。そして、これをうけて六十年十一月には新たな一〇年計画として「豊岡市基本構想」が策定された。その内容は、二十一世紀の都市像として人口七万人の「豊かな自然と伝統に育まれた、うるおいと活力のある生きがい都市」を基調テーマとし、その実現を目指して次の五つの目標をかかげている。

- 一、港や空港のあるみんなが集える中核都市
- 一、工場公園やショッピングモールのある産業の盛んな都市
- 一、大学や博物館のある教育・文化・福祉水準の高い都市
- 一、円山川に育まれた安全で住みよい都市
- 一、心豊かな福祉・健康あふれる都市

豊岡市は、すべての市民がここに生きること誇りに思う魅力ある町でなければならない。二十一世紀に向けて市民の夢はひろがる。